「聖玉の王」シリーズ

赤の領主

と

黒の兵士

立川 みどり

otherworld(ザ・ワールド)

設定

地名

ハウカダル島　　イギリスとアイルランドを合わせたぐらいの大きな島で、南３分の２ほどに人間の１２の王国がある。
ホルム王国　　人間の１２の王国の１つ
シグトゥーナ　　ホルム王国の首都
登場人物

エイリーク卿　　ホルム王国の第３騎士団長。「赤の領主」の異名をもつ。
レイヴ　　第３騎士団に配属されていた兵士。
グンナル王　　ホルム王国の国王。エイリーク卿のいとこ。
カーラ　　エイリーク卿の妻。
オレイン　　魔族。
（名前だけ登場する人物）
オーラーブ　　ホルム王国の王太子。エイリーク卿の弟で、グンナル王の養子（王女の婚約者）。

森の中を、騎士と歩兵がただふたりでさまよっていた。
ふたりともまだ若い。騎士は、夕焼けの空を思わせる赤毛と、夕闇を思わせる灰色の目の持ち主で、鎖の鎧の上に、金糸で刺繍をした緋色のチュニックを着て、緋色のマントをはためかせている。
指揮官の証のりっぱな軍装と口もとの髭のせいで、遠目には三十歳ぐらいに見えなくもないが、近づいてよく見ればもっと若いとわかる。せいぜい二十代半ばといったところであろうか。
供をする歩兵は、湿った黒土の色の髪を無造作に束ね、瞳は湖の水面のごとき深い青緑。その髪と目の色は、魔性の者たちの夜の色の髪と緑の瞳を思い起こさせ、不安を呼び覚ますが、明らかに魔性の者たちのそれとは色合いが違う。
ただふたりで本軍から離れてしまったというのに、不安の色さえ見せぬ落ち着いた物腰と、油断のない鋭い眼光から、かなり戦い慣れた者と見えるが、ほこりと返り血に汚れてなおみずみずしい若い肌と、少年の柔和さをいまだ残した美しい面ざしを見れば、せいぜい二十歳かそこらだろう。いや、いまだ十代かもしれぬ。
「完全に迷ってしまったようだな」
騎士がつぶやくと、歩兵は、何を今さらと言いたげな視線をちらりと馬上に向け、無言のまま、すぐにまた前方に目を向けた。主君に対するにしては、あまりにそっけなく、ぞんざいな態度だ。
それもそのはず、歩兵は騎士の従者ではなかった。正規の兵ですらなかった。半ば強制的に、半ば報酬の金につられて徴兵に応じた若者である。
騎士の名は、エイリーク卿。王家の血に連なり、五つの村を治めて、その髪の色から〈赤の領主〉の異名をもつ貴族であり、ホルム王国の七つの騎士団のひとつ、第三騎士団を束ねる騎士団長でもあった。
騎士団長ともなれば、末端の兵士のひとりひとりまで把握しきれるものではない。ただ、ふたりでさ迷い歩いたここ一刻ばかりのあいだに、エイリーク卿は、この歩兵が第三騎士団の下に配属された歩兵のひとりで、レイヴという名であることを聞き出し、若いながらになかなか腕が立つことも、自分の目で見て知っていた。
とちゅうで魔族の残党数人と鉢合わせをしたとき、レイヴは、豪傑として知られたエイリーク卿の上をいく腕前を発揮していたのである。
レイヴのほうは、さすがに騎士団長の顔と名前ぐらいは知っていたが、ただそれだけのことだった。百人の騎士と千人の歩兵からなる集団にあって、トップに立つ騎士団長と末端の歩兵とは、まったく見ず知らずの人間も同然だった。
それでも、ここにいるのが別の歩兵であれば、騎士団長とふたりになれば、恐縮してかしこまるか、卑屈におもねろうとしたことだろう。
だが、レイヴは、そういった畏怖とも卑屈さとも無縁の人間だった。
黙々と歩いていたレイヴは、左手の木々の向こうから聞こえるかすかな物音に気づいて、そちらをふり向いた。ひと呼吸遅れて、エイリーク卿もそれに倣う。
足音らしき物音は徐々に近づいてきて、やがて木々の合間から姿を見せたのは、年のころ七歳ぐらいの魔族の子供である。
だが、おそらくは見かけどおりの年令ではなかろう。魔族は人間よりも年をとるのが遅いのだから。
子供は、少年とも少女ともつかぬ美しい顔立ちをしていた。そのぐらいの年令では、人間の子供でも、服装の違いがなければ性別を見分けるのは難しいが、魔族の子供には性別自体がない。魔族は、幼いころには

性はなく、外見の年令が人間の子供の七歳から十二歳ぐらいになったとき、性が分かれる生きものだった。
　子供は、ふたりの敵に気づいて立ち止まった。みるみるその美しい面が恐怖で覆い尽くされる。
　怯えるのも当然。魔族の村が人間の軍隊に襲撃されたとき、逃げ遅れた魔族の女や子供たちがどうなったか、その子供が知らないはずはない。
　掠奪と暴行は軍隊の常。まして、魔族に対しては、人間たちには根深い恐怖と憎悪があり、それが人間側の連合軍の男たちの凶暴性をいやがうえにも増していた。
　抵抗した者も、逃げ惑うばかりの者たちも、女たちはことごとく犯され、むごたらしく殺された。女たちだけでなく、まだ性の分かれぬ幼い子供たちも、少年たちも、同族の女たちと同じ運命をたどった。
　さらに村から逃げのびたと思われる者たちに対しても、軍は容赦なく残党狩りを命じた。
　人間どうしの戦いなら、むごい掠奪暴行で女や子供や年寄りを殺すことはあっても、逃げた非戦闘員まで追うことはまずない。
　だが、魔族との戦いでは、女、子供、赤ん坊に至るまで、ひとりとして逃がすなという命令が出ていた。人間どうしのふつうの戦争と違って、征服するための戦いでも奪うための戦いでもなく、全滅させるための戦いだった。
　おそらく、兵士たちの目を逃れて逃げのびた魔族は皆無に等しかっただろう。あるいは、いま目の前にいる子供が唯一の生き残りやもしれぬ。
　子供は、いま来た方向にちらりと絶望の視線を走らせると、そちらとも前方のふたりとも違う方向に転じて、また森に駆け込もうとし、転倒した。
　どうやら、地を這う茨の蔦にでも足をとられたのだろう。足をくじいたのか、腰が抜けたのか、すぐには立ち上がれないようすで、子供は敵の騎士と歩兵を見上げた。
　絶望に彩られた子供の顔が、つかのまエイリーク卿の脳裏で別の子供の面差しと重なった。
　不安と悲しみに涙ぐんでいた子供。目の前の子供とちょうど年のころは同じ。とはいってもそれは外見だけのことで、エイリーク卿の苦い記憶の中にある子供は、まぎれもなく人間の子供だったが。
　それでも外見の年令が似ていれば、連想せずにはいられない。
　だから、エイリーク卿は、レイヴが子供のほうに歩み寄りかけたとき、その背中に向かって思わず叫んでいた。
「やめろ！　殺すな！　まだ子供だ！」
　明らかに軍規違反の命令であり、たとえ騎士団長が発したものとはいえ、レイヴには従う義務はない。レイヴは、エイリーク卿をふり返りもせず、子供のほうに歩み寄った。
「おい、やめろ！」
　エイリーク卿がレイヴを止めるために馬を降りようとしたとき、卿の予想に反し、レイヴは子供のすぐ前で腰をかがめて、子供の足にからまっていた蔦をはずしてやった。
「立てないのか？」
　驚いている子供にそう訊ねると、レイヴは、返事を待たずに、子供の両脇を支えて抱き起こし、地に足が着くようにしてやった。
　そのとき、子供が来た方角から足音がして、騒々しい声が上がった。
「おい、横取りするな。そいつはおれたちが追ってたんだ」
　先頭に立って森から出てきた歩兵がどなり、つづいて姿を現わした歩兵が、エイリーク卿に気づいて、おもねるように言った。
「おれたちがそいつを追ってたんです。認めてくださってもよろしいでしょう？」
　ふたりとも胴鎧を青く染めており、第六騎士団の歩兵とわかる。

　声のほうをちらりとふり返った黒髪の歩兵は、子供ががたがた震えながらもしっかり足で地を踏みしめていることを確かめると、手を離した。
「行け」
　子供は身をひるがえして、森の中に逃げ込んだ。
「ばか！　なぜ逃がすんだ？」
　子供のあとを追おうとした歩兵の前に、行く手を遮るように、レイヴが立ちはだかった。
「おい、何しやがる？　魔族のガキが逃げるじゃねえか」
「そいつ、魔族の一味じゃねえのか？」
　歩兵たちのひとりが剣を抜くのを見て、エイリーク卿があわてて制止した。
「よさぬか！　味方同士で殺しあう気か？」
「けど、殿さま」と、剣を抜いた歩兵が卿をふり仰いだ。
「殿さまも見てやしたでしょう？　こいつ、魔族を逃がしたんですぜ」
「子供を殺すなと命じたのは、わたしだ」
　第六騎士団の歩兵たちは、驚いて卿をまじまじと見上げ、それから、どうしようかと相談するように、ちらりと互いの顔を見た。
　魔族を皆殺しにしろという命令はすべてに優先する。騎士団長とはいえ、それに矛盾する命令はできないはずだ。
　だが、彼らは、上位にある者には逆らわないという習性が身についていた。貴族、しかも第三騎士団長のような高位の貴族が相手では、どちらの言い分が正しいかなど、何の意味ももたない。手討ちにされればそれまでだし、争いになって相手を殺したりすれば、問答無用で自分たちのほうが処罰される。
　それで、彼らは、視線を交わした一瞬のうちに、エイリーク卿に逆らわないことに決めた。それで、剣を抜いていたほうの歩兵が、剣を鞘におさめながら、逆らうつもりはないという意思表示に話題を転じた。
「殿さまのような方が、こんなところで供をひとりしか連れずに、いったいどうしましたんで？　魔族の残党がどこに潜んでいるかしれませんから、危険ですぜ」
「道に迷ったのだ」
「そうですか。なら、第六騎士団のところまでなら、案内してさしあげられますぜ。第三騎士団がどこにいるかはわかりませんが」
「それは助かる。第六騎士団のところまででいい」
　そうして四人は、第六騎士団のもとに向かったのだった。

　エイリーク卿とその供の歩兵を案内して戻った第六騎士団のふたりは、卿と行動をともにしているあいだ、卿に従順にふるまっていたものの、内心はおもしろくなかった。なにしろ、暴行と殺戮の欲望を邪魔されたうえ、魔族を殺せばもらえるはずの褒賞をもらいそこねたのだ。
　それでも、エイリーク卿が彼らの領主であれば、彼らは口をつぐんでいたろう。領民が領主の機嫌をそこねれば、あとに待つのは破滅ばかりなのだから。
　だが、エイリーク卿は、彼らの領主でもなければ騎士団長でもなかった。彼らは、第六騎士団の騎士団長ブーリス卿の領民であり、しかも、ブーリス卿とエイリーク卿はあまり仲がよくない。
　それで、ふたりは、ブーリス卿に事の顛末を報告した。
　ブーリス卿は、ふたりに褒美を与えると、その後まもなく本軍を率いて合流したグンナル王に、政敵エイリーク卿とその部下の違反行為を密告した。
　グンナル王は、ただちにエイリーク卿とレイヴを召喚した。
「魔族はひとりたりとも逃がすなと、そう厳命したはずだ。しかも、この命は、十二王国の合議の上で出たもの。わが国に違反者が出たとあっては、他の国にも示しがつかぬ」
　グンナル王は、エイリーク卿に向かって言ったあと、そのかたわらに立つ黒髪の歩兵に目を転じた。
「魔族を逃がしたのはおまえだな。名は何という？」
「レイヴ」
「両親の名と出身地は？」
「親の名は知らない。生地も知らないが、ものごころついたときからシグトゥーナに住んでいるから、たぶんそこの生まれだろう」
　国王をはじめ、まわりにいる者たちの顔に蔑みの色が走る。
　ハウカダル島の十二の王国では、身分を問わず、正式に名を名乗るときには両親の名と生地を告げるのが習いであり、それが出自の確かな証とされていた。
　男が妻以外の女を孕ますのは不都合なこととは考えられていないので、両親が正式な夫婦か否かは問題とされない。生地が自国か他国かということも問題とはされない。両親の名を知っているか否かが問題なのだ。
　親の名も出身地も知らぬ者は、望まれずに生まれて親に見捨てられた者、おそらくは身持ちの悪い女か娼婦の産んだ子供という目で見られた。
　それはもちろんその者のせいではないのだが、多くの社会の常で、「子供に責任はない」という発想をする者はめったにいない。「魔族が悪者とはかぎらない」という発想をする者が、めったにいないのと同じように。
　まして、レイヴの国王に対するぞんざいな口のききようは、貴人に対する口のきき方をしつけられていないこと、自ら覚えようともしなかったことを意味している。
　それで、その場にいたほとんどの者たちが、レイヴに蔑みの目を向けた。ことに、エイリーク卿に敬意を抱いている第三騎士団の幾人かの騎士たちは、自分たちの大切な上官が、素性のあやしい男のために苦境に立たされていることに対して、怒りのこもった目をレイヴに向けた。
（どうしてこんな魔族の取り替え子のような者を、軍に加えてしまったのか？）
　レイヴの黒い髪が、魔族の闇の色の髪とは色合いが違うことがわかっていてもなお、その黒髪は魔族の髪を連想させ、彼らの憤りをいや増した。

とりわけ後悔に駆られたのは、レイヴの属する歩兵隊の隊長である。直属の上官のうえ、レイヴを含むシグトゥーナ市の孤児たちを強引に徴兵したのは彼だったので、責任が自分にも及ぶのではないかと、内心ではらはらしていたのだった。
ただ、エイリーク卿ひとりだけが、皆の軽侮の視線にも動じる気配のないレイヴの落ち着きように、この若さでたいしたものだと感心していた。
「魔族を逃がしたのは、おまえの一存か？　それとも、いっしょにいた騎士団長の命令か？」
国王の問いに、レイヴは即答した。
「おれの一存だ」
「では、軍規に従って、おまえは縛り首だ」
非情な宣告にも、レイヴは動じる気配を見せず、エイリーク卿のほうが狼狽した。
「お待ちください、陛下！　その者が魔族の子供を逃がしたのは、わたしの命令に従ったからです」
「部下思いなのはおまえの長所だと思うがな、エイリーク。今回のような庇い立ては行きすぎだぞ」
「べつに庇い立てでは……」
エイリーク卿が言いかけるのを、国王は指を突き出して遮った。
「いいか、エイリーク。おまえは、父亡きあとのわたしを何かと支えてくれた叔父の忘れ形見で、わが世継ぎの王子オーラーブの兄。しかもおまえ自身、わが国になくてはならぬ優秀な人材だ。そのおまえを、規律を守らぬ部下をかばうばかりに処罰するようなことは、わたしとてしたくはないのだ」
グンナル王の真意に、エイリーク卿は気がついた。王は、事実がどうあれ、軍規違反は歩兵が一存でやったことにしてしまいたいのだ。
「いかに王家の血に連なる者とはいえ、いや、王家の血に連なる者だからこそ、おまえが軍への背反行為をしたのなら、厳罰に処さねばならぬ。……おまえとて、その若さで、妻とまだ赤子のわが子を残して牢に入りたくはなかろう」
エイリーク卿の脳裏に、遠征に出発して以来、もう半年近くも会っていない美しい妻と、出発のときにはまだ首もすわっていなかった息子の姿が浮かんだ。
やっといとしい妻子の元に戻れるというのに、牢につながれるようなことはしたくない。
それに、罪に問われて牢につながれるということは、領地と財産を没収されることを意味している。ひょっとすると、居城も没収されるかもしれない。そうすれば、妻は、赤子を連れて実家に帰り、肩身の狭い思いをしなければならないだろう。
そんなことはとてもできないと、エイリーク卿は思った。
レイヴには気の毒だが、エイリーク卿があくまで彼を弁護して罪に問われたとて、騎士団長の命令より優先すべき命令を無視したことに変わりはない。どのみちレイヴは罪に問われ、見せしめのために処刑されるだろう。
どうせ助けることができないのなら、自分までがいっしょに破滅することはない。
「この男が魔族の子供を逃がしたのは、おまえの命令ではないな？」
「はい、陛下」
自分の声が、エイリーク卿の耳に、まるで他人の声のように響いた。軍規に逆らって魔族の子供を殺すなと命じたことより、このほうが、よほどひどい裏切りだという気がした。
レイヴは、エイリーク卿の裏切り行為を意に介していないのか、ふり向こうともしない。
どうしてこの男はこんなに平然としているのかと、エイリーク卿は苛立った。
こちらをふり向いて口汚くののしるか、卑屈に命乞いをして醜態をさらせば、これほどの良心の呵責も自己嫌悪も感じずに、この男を見捨てることができるはず。なのに、レイヴはそのどちらもしようとしな

い。その落ち着きはらった態度は、「最初からあんたがこうすることはわかっていたよ」と言っているかのように、エイリーク卿には見えた。
　そして、卿がそう思ったのはあながちまちがいではなく、レイヴは最初から騎士団長などあてにはしていなかった。逃げ出すチャンスがどこにあるだろうかと、ひそかに思案をこらしていたのである。
「さて」と、グンナル王はレイヴのほうを見た。
「慣例に従って、最期の望みがあるなら言うがよい。かなうことであればかなえてやろう」
「どうせ死ぬのなら郷里で死にたいのだがな。見せしめにするつもりなら、そっちもそのほうが都合がよかろう？」
　グンナル王は鼻先で笑った。
「少しでも死ぬのを先にのばそうという、小賢しい手だな。あいにくその望みはかなえてやるわけにはいかん。帰途は長いというのに、処刑するだけの罪人を連れ帰るという手間を、疲れた兵たちにかけさせる気はない。見せしめなら首だけでじゅうぶんだ。魔族たちと同様にな」
「そうか」
　レイヴは軽いため息をついた。相変わらず、絶望も悲嘆もその美しい面にはあらわれないが、さすがに、あてがはずれて少しがっかりしたという表情になった。郷里のシグトゥーナ市に何の愛着ももってはいなかったが、もっと人里に近づいてから脱走したかったのだ。
　魔族たちの住まうこの森まで、山や森、原野といった道なき道を行軍してきたので、地図もなしにひとりで人間の領域まで戻るのは難しい。レイヴはべつだん方向感覚が鈍いわけではなかったが、ものごころついて以来、シグトゥーナ市を離れたのは今回の遠征が初めてなので、慣れた旅人たちのように星や太陽の位置から方角を知る術はほとんど知らない。
　軍の移動した跡を、最後尾から充分な距離をあけてたどれば、戻れなくはないかもしれないが、魔族の領域にひとりで取り残されるのは危険だ。
　戦いに勝利をおさめ、魔族の村を三つ滅ぼし、村にいた魔族をほぼ皆殺しにしたとはいえ、村にいたのはおもに非戦闘員の女や病人や子供たち。森のあちこちで戦った魔族の戦士たちには、逃げのびた者が幾人もいただろうと推測される。
　現にレイヴ自身、エイリーク卿とともにさまよっていたときに数人の魔族の戦士たちと戦っている。
　それに、別の森に住む魔族たちや、魔族の故郷とされる魔界に住む魔族たちが、仲間の危機を知って駆けつけてくるかもしれない。
　そういったことを考えれば、こんなところで逃げ出すより、人間の住む町が間近に近づいてから逃げ出したほうがいい。シグトゥーナに戻るのはまずかろうが、他の十一の国のいずれかに潜り込めば、追っ手がかかることはまずない。
　隊から離れて四人だけでいたときにさっさと逃げ出さず、おとなしく他の三人といっしょに戻ってきたのも、そんな計算があったからだ。
　だが、いささか楽観的すぎたそのもくろみははずれた。ならば、隙をみてさっさと逃げることだ。
　内心でそんなことを考えているレイヴの横顔を、エイリーク卿は、鋭い胸の痛みとともに見守った。
　エイリーク卿が「殺すな」と命じたとはいえ、軍規違反を承知の上で魔族の子供の命を助けた心やさしい若者。潔いのか、それとも逃げ出す算段でもあるのか、処刑の判決を受けてもなお落ち着きはらい、エイリーク卿に責任をなすりつけようとはしない若者。この男がこの若さで命を失うのは理不尽だと思った。
（魔族と戦ったときにはじつに勇敢だったし、腕前もよかった。わたしひとりではまちがいなくやられていたろう。本来なら、指揮官を守ったとして褒賞されてしかるべきものを）
　心の中でそうつぶやいて、エイリーク卿は、この若者を救う余地がまだ残されていなくもないことに気

がついた。はたしてそれが有効かどうかはわからなかったし、へたをすれば、卿自身が王の不興を買う恐れがあったが。
「連れていって始末しろ」
　グンナル王がレイヴの両脇を固めた兵士たちに命じたとき、エイリーク卿は衝動的に叫んだ。
「お待ちください、陛下！」
　王が不機嫌そうにふり返る。
「まだ何かあるのか？」
「その者は褒賞に値するだけの武勲を立てております。それに免じて罪を減じてやるわけにはいきますまいか？」
「武勲とは？」
「ふたりで迷っていたとき、魔族五名に襲撃され、わたしがふたり斃しているあいだに、その者は残りの三人を斃しました。わたしひとりでは、五人も一度に相手をするのは難しかったでしょう」
「やめておけ、騎士団長」と、初めてレイヴがエイリーク卿をふり向いて言った。
「あんたまでとばっちりを食うぞ」
　せっかく逃げる算段を考えているのに、この気のやさしい騎士団長まで罪に問われる状況になったら困る。天涯孤独の自分と違って、地位も名誉もあり、妻子までいる男が、そうかんたんに逃げ出せないのはわかっている。見捨てて逃げるしかないが、それはなんとも寝覚めが悪い。
　レイヴがそんなことを考えていたとき、エイリーク卿の言葉に思い当ることでもあるのか、はっとした表情になった騎士がいた。第六騎士団の騎士のひとりである。
　口を開こうかどうか迷っているその騎士のようすを見咎めて、グンナル王が訊ねる。
「何か言いたいことがあるのか、トスティ」
　名を呼ばれた騎士は、騎士団長の不興を買いたくなかったので、一瞬ためらった。が、へたなごまかしかたをすれば王の不興を買う。
　彼は、遠征のあいだはブーリス卿の指揮下に入っているとはいえ、ブーリス卿の臣下ではなく、王の臣下である。王に嘘をついてまでブーリス卿の機嫌をとる義理はない。
　それでトスティは、自分が知っているかぎりの事実を王に述べた。
「兵のなかに、魔族の戦士を五人斃したと申告した者がおりました。しかし、その者がひとりはぐれていたのはごくわずかな時間でしたし、魔族五人と同時に戦って勝てるほどの実力があるとも思えませんでした。しかもその五人の傷は、ふたりが槍、三人が剣で、いずれも相当な手練れによるもの。だれか他の者の手柄を横取りしたのではないかと不審に思っていたのです」
「なるほど。……この者の所属する隊の隊長はだれだ？」
「はいっ！」と、いきなり名指しされた歩兵隊長が、緊張でうわずった声で返事しながら、直立不動の姿勢をとった。
「この者の他の戦功はどうなのだ？」
「勇敢に戦っておりました。わが隊のなかでは、おそらくいちばんの腕利きでしょう」
　それは事実だったが、歩兵隊長が言わなかったもうひとつの事実もある。レイヴは、魔族の戦士たちとはきわめて勇敢に戦ったが、村での殺戮や掠奪暴行には加わろうとせず、歩兵隊長はそれに腹を立てていたのである。
　そのうえに今回の不始末だったから、この男は魔族に同情的なのではないかと、歩兵隊長は疑っていたのだが、自分やエイリーク卿の保身を考えれば、もちろんそんなことは伏せておくほうがいい。
　王は自分の副官をふり返った。王の乳兄弟であり、騎士たちのなかでも王の信任のもっとも厚い人物だ。

「どう思う？」
「間諜の疑いがある場合、武勇にすぐれた裏切り者は、軟弱な裏切り者よりはるかに危険です」と、副官は答えた。
「しかし、間諜ということはまず考えられますまい。この者が助けたのは無力な子供で、魔族の戦士たちとは戦っておりますから」
「わしも、この者が間諜だとは思っておらん。まがまがしい色の髪だが、魔族の髪の色とは確かに違う。この者はまぎれもなく人間だ。だが、魔族を実際に見たことのない者は、区別がつかぬゆえに黒髪の者を忌み嫌う。ゆえに、黒髪の者は、たいがい、魔族を激しく憎むか、でなくば己れを魔族の血を引く者ではないかと思い、魔族に親近感をもつ。そして、この男は魔族を憎んでいるようには見えぬ」
　王は再びレイヴに目を向けた。
「どうだ？　おまえは、自分を魔族の血を引く者ではないかと疑ったことはないのか？」
「いいや」
「なぜ、そう言い切れる？」
「おれは人間だと教えられた。子供のころに」
「なるほど。では、なぜ魔族に情けをかけた？」
「気まぐれだ。ただの子供で、戦士ではなかったしな」
　グンナル王は腹を立てた。王は魔族との戦いに日夜心を砕いているというのに、下々の者はどうしてこう無責任なのか、と。
　だが、レイヴの堂々とした態度に感心もしていたので、怒りを抑えて訊ねた。
「魔族が憎くはないのか？」
「べつに憎くはない」
「では、なぜ戦いに加わったのだ？」
　歩兵隊長が一瞬ぎくっとした表情をした。が、それに気づいたのか気づかなかったのか、彼が内心恐れていた答えとは違う答えを、レイヴは口にした。
「腹が減っていたからだ」
　その返事で、王は、この若者が天涯孤独の孤児だということを思い出した。
　そういう者が食い詰めて軍に入るのはよくあることだ。でなければ、どうしようもないならず者となるのだ。
　この男もならず者だったのかもしれないが、そういう世をすねた者にありがちな荒んだ雰囲気はない。
　王は、つかのま思案したのち、裁決を下した。
「よかろう。軍規を破ったのは重罪だが、騎士団長を守った業績は大きい。その業績と、自分ひとりの罪と認めた潔さに免じて、処刑は免じてやろう。だが、無罪とするわけにもいかぬ」
　王は、エイリーク卿のほうに目を転じた。
「エイリーク、この者はおまえに任せる。次の戦いのときまでに、もっと兵士らしく仕込んでおけ」
　王の一言で、レイヴはエイリーク卿の預かりとなったのだった。

なつかしい故郷への帰途、エイリーク卿は、落ち着かない視線をときおり斜め前に走らせた。
そこを行くのは、帰郷の喜びに胸を躍らせる兵たちのなかでただひとりの囚われ人。剣を取り上げられ、縄で両手の自由を奪われたうえ、かつての同僚たちに見張られて、黙々と歩くレイヴである。
レイヴは、食事のときも両手首を縛られたまま、食べにくそうにスープをすすったりパンをかじったりし、夜は木に縛りつけられて睡眠をとった。
そんなレイヴの姿を、エイリーク卿は痛々しく見守った。魔族の子供を助けたことは後悔していなかったが、わが身の保身をはかって、この若者ひとりに罪を背負わせたことには良心が痛んだ。
レイヴの姿を見ると、苦い思いに捕われずにはいられないのだが、それだけにかえって、彼から目が離せない。
それで、郷里のホルム王国に着き、グンナル王の率いる本隊をはじめとする他の騎士団と分かれ、第三騎士団だけになると、食事のとき、ついにエイリーク卿は、レイヴの所属する歩兵隊の隊長に命じた。
「もうほどいてやれ。それでは食べにくかろう」
「ですが、閣下」と、歩兵隊長は当惑した視線をエイリーク卿に向けた。
「殊勝げにふるまっているからって、だまされてはいけません。こいつは逃げるチャンスを窺っているのです。シグトゥーナでは、こいつは札つきのワルだったのです」
「どっちが」と、少し離れたところで、こそこそ話す者たちがいる。レイヴ同様、まだ少年の面差しを残した若い歩兵たちだ。
歩兵隊長に横目でにらまれ、歩兵たちがこそこそ立ち去ろうとしたのを、エイリーク卿が呼び止めた。
「まあ待ちなさい。レイヴの知り合いなのか？」
雲の上の人に等しい騎士団長にいきなり声をかけられ、歩兵三人が恐縮して立ち止まる。
「シグトゥーナの不良仲間です」と、歩兵隊長が彼らに代わって答えた。
「仲間などではない」
ふいに、それまで黙っていたレイヴが口を開いた。
「そいつらとつるんだことなど、一度もない」
「けっ、おれたちだって、おめえを仲間だなんて思ってねえよ」
歩兵たちのひとりが、顔を朱に染めて言い返したあと、つけ加えた。
「ただ、ちょっと、ようすを見に来ただけだ」
「心配したのだな」
エイリーク卿の言葉に、その歩兵は、「とんでもねえ！」と力いっぱい否定したのち、相手が騎士団長だと気づいて、あわてて言い直した。
「いえ、とんでもないです。おれたちは、そいつとはそりが合わなかったんです。そいつはそういう魔族みたいな頭をしてやがるし、お高くとまってやがるし……。でも、そいつが魔族のガキを助けたってのは、たぶん、魔族とか、裏切りとか、そういうのとは関係ないです。そいつは、なんていうか……、ときどき、わけのわからんことをやらかすやつですから」
「そうです。徴兵のときも……」
もうひとりの歩兵が横から口をはさみ、歩兵隊長が横目でにらんで彼を黙らせた。
歩兵隊長は、町のちんぴらたちを兵士にするため、彼らの使い走りのようなことをしていた子供を人質にとって脅し、応じたレイヴを兵士にしたのだ。そんなことがエイリーク卿にばれては困る。

「ダグ」と、エイリーク卿は、この若者たちが気の毒になって、歩兵隊長に向かって言った。
「そうにらんでやるな。徴兵のときに何かいざこざがあったらしいことは察しがついたが、いまさらそれを責めたりはせんよ。兵の頭数をそろえるのに苦労したろうってことは、わかっているからな」
　ダグの顔がぱっと明るくなるのを見て、どうやらよほど知られたくないようなことをしたらしいなと、エイリーク卿は見当をつけた。
　何があったのか知りたくはあったが、ダグを追い詰めれば、とばっちりは目の前の若者たちにいく。
　おそらくこの若者たちは、不良と形容されるからには、すりやかっぱらいといった悪事で食い扶持を稼いでいたのだろう。それなら、罪人をそのまま軍に加えるのは危険すぎるから、ダグは、彼らを徴兵するとき、それまでの罪を不問にすると約束したにちがいない。
　だが、ダグににらまれたら、へたをすれば、そんな約束もなかったことにされてしまうかもしれない。シグトゥーナ市は王の直轄領なので、そこの住人に対して、エイリーク卿には何も権限がなく、彼らの運命を左右できるのは、市の総督の配下であるダグなのだ。
　それで、エイリーク卿は、事情を追求せず、ただこう言った。
「彼らにまっとうな職を世話してやれば、治安の面でも、来年の徴兵の面でも楽だと思うが」
　若者たちは一抹の期待に目を輝かせ、歩兵隊長は「はあ」とあいまいな返事をした。
　ダグの目からすれば、この若者たちはクズ同然。へたに職を紹介して問題を起こされれば自分の責任になるという不安がある。が、その一方、エイリーク卿の機嫌をとっておいたほうが得だという打算もあれば、街のちんぴらを追いかけまわして兵にしたてあげた今年の苦労を、来年もやりたくないという気持ちもある。
　それで、彼は、どうとでもとれる返事をした。
「そうですね。今まで悪事を働いていた者にできるような仕事があるかどうかはわかりませんが、探すだけは探してみましょう」
「それがよかろう」
　言いながら、エイリーク卿は、反対されないうちにと、さっさとレイヴの縄を自らほどいてやった。
「閣下！　そんなことをして逃げ出されたら……」
「心配するな。全責任はわたしが負う。万一、この者が逃げ出したとしても、おまえの責任にはならない」
　そう言ってから、エイリーク卿は、魔族の子供を逃がした責任をレイヴに押しつけたことを思い出した。
（説得力がないな）
　自嘲気味にそう思ったとき、ふいにレイヴが口を開いた。
「逃げ出すつもりはない。そんなことをして、もし、また……」
　独り言のようにつぶやいたその言葉に、エイリーク卿は興味をそそられた。
（もし、また？　過去に何かあったのか？）
　知りたいと思ったが、もの思いに沈んだレイヴのようすから、訊ねるのはためらわれる。それで、エイリーク卿は、別の問いを口にした。
「心配してくれているのか？」
　レイヴは驚いたようにエイリーク卿を見上げた。
「べつにそういうわけではないが……」
　当惑したようなその口調で、エイリーク卿は気がついた。どうやらこの若者は、ほんとうに卿を心配してくれており、しかも本人にはその自覚がなかったらしい。
　彼の反応は、エイリーク卿には新鮮だった。
　王の血縁者で騎士団長という立場上、エイリーク卿は、畏敬されることにも、尊ばれることにも慣れてい

たが、そういう身分への畏敬の念をもっているとも見えないのに、誠意だけを示してくれる人間は珍しい。礼節はあっても誠意のない人間はたくさんいるが、その逆の人間と出会ったのは初めてだ。
　ますますこの若者に興味を覚えるとともに、エイリーク卿は、大きく心を動かされてもいた。
　エイリーク卿は、身分と立場から備わった威厳と、いかめしくも見えるあごひげから、一見重々しい人柄と見えるが、そのじつ、情に動かされやすいところがあった。でなければ、魔族の子供を助けるよう思わず命じてしまったり、レイヴに罪を背負わせたことに罪悪感を感じたりはしなかっただろう。
「怒っているかと思っていた」
　エイリーク卿の言葉に、レイヴはふしぎそうに卿を見上げた。
「どうして？」
「どうしてって……。おまえひとりに責任をなすりつけて、見殺しにしようとしたからだ」
「大げさな。おれひとりなら逃げられる。あんたは、妻子がいるのなら、逃げられはしないのだろう？」
「逃げるつもりだったのか」と、歩兵隊長が叫んだ。
「なんてやつだ。……閣下、やはり、こいつの縄を解くのは危険です」
「もう逃げないと言っているではないか。もう逃げる必要もない」
　エイリーク卿は、視線をダグからレイヴに移した。
「逃げ出さなくても、おまえがひどい目に遭うことはない。誓ってもいい」
「親切にしてくれるのはうれしいが……。あんたが王さまににらまれるんじゃないのか？」
「心配するな。陛下は狭量な方ではない。おまえが来年の春までおとなしくしていて、また戦に加われば、わたしもおまえも咎められることはないだろう」
「ずいぶん信用しているんだな、王さまを」
「当然だ。陛下はわが剣を捧げた主君だし、父亡き後、ずいぶんよくしてくださったのだ」
「ふうん」と、レイヴは気のない返事をした。グンナル王にそれほど好感を感じてはいなかったので、エイリーク卿の王に対する信頼が理解できなかったのだ。
　だが、レイヴは、わずかな会話だけで王の人柄を把握できたと思うほど独善的ではなく、自分に理解できないものを否定するほど頭が固くもなかったので、エイリーク卿の言葉に水をさすようなことはしなかった。
　エイリーク卿は、食事が終わったあとも、レイヴに縄をかけさせなかった。歩くときも夜寝るときも、他の兵士たちと同じようにまったくの自由の身にしてやった。
　歩兵隊長や腹心の騎士たちは、レイヴが脱走するのではないかと心配したが、どうやら逃げ出す気配がなさそうなのを見て、うるさく言わなくなった。
　よく考えてみれば、身寄りがないうえに、魔族を連想させる不吉な黒髪の持ち主とあっては、自由の身となっても、冬を越せるようなまともな仕事は見つかるまい。それなら、おとなしくエイリーク卿について行ったほうが食事と寝床を確保できる。それなら、わざわざ逃げ出したりはしないだろう。
　歩兵隊長や騎士たちは、レイヴの心のうちをそう推測したのだった。
　エイリーク卿はといえば、レイヴに恨まれてはいないと知ったのちは、ずいぶん気が楽になり、気心の知れた騎士たちに対するのと同じように、彼によく話しかけた。罪の意識から解放されたためばかりではなく、まわりが自分の部下ばかりになった気楽さや、わが家を目前にした喜びから、エイリーク卿は陽気だった。
「おまえは、好いた女性はいないのか？」と、エイリーク卿はレイヴに訊ね、返事も待たずに言葉をつづけた。
「身を固めるというのもいいものだぞ。わたしも妻をめとるまで知らなかったが」

腹心の騎士たちが、思わず顔をほころばせる。エイリーク卿が愛妻家だというのは、彼らのあいだでは周知の事実だったのだ。
騎士たちは、エイリーク卿がレイヴに好意を示すことに対して、卿が王ににらまれるような事態になりはすまいかという一抹の不安を感じていたのだが、郷里を前にして浮かれている卿を見ると、そんな心配も忘れて、ほほえましくなってくる。自分たちもまた、なつかしい家族との再会を目前にしているのだから、なおさらだった。
レイヴもまた、そんなエイリーク卿を見て、無愛想な表情をほころばせた。
同じ言葉でも、説教がましく言われたのならうんざりするところだが、説教しようという気持ちなどエイリーク卿にないのは明らかだ。
「貴族は政略結婚しかしないから、夫婦に愛情がないのはふつうだと聞いたが、そういうこともないんだな」
言いにくいことをずけずけと言うレイヴに、エイリーク卿は朗らかに笑った。
「わたしもまあ、政略結婚というほど大げさなものではないが、家のために、一度しか会ったことのない女と結婚したのさ。だから期待なんてしてはいなかった。けれど、カーラはたいへん情熱的な女でね。熱烈にわたしを愛してくれた。で、こちらも、気がつけば、彼女がいとしくてたまらなくなっていたというわけさ」
周囲の騎士たちのあいだから、クスクスと笑い声が上がる。バカにしているわけではなく、好意的な笑いだ。彼らはこの騎士団長を好いており、その愛妻家ぶりをほほえましく思っていたのである。
エイリーク卿ののろけを聞いていると、冬のあいだだけとはいえ平和が訪れたことを実感し、うさんくさい罪人への疑惑も薄れていく。
この囚われの兵士は、命令を破ったとはいえ、ともあれエイリーク卿をかばおうとしたのだ。ならば、心配するほどのことはないかもしれない。
それで騎士たちは、一抹の不安を抱きながらも、それ以上レイヴのことを疑うのをやめたのだった。

　エイリーク卿は、騎士や兵士たちと別れたあと、自分の城に勤務する従者ふたりとレイヴを伴って、なつかしいわが家に帰り着いた。
「わが君！」
　喜びを満面にあらわして、若く美しい女が出迎え、エイリーク卿に抱きついて熱烈なキスを浴びせかける。
　従者ふたりは、礼儀正しく、再会を喜ぶ若い夫婦から視線をそらせたが、レイヴは、珍しいものでも見るようにふたりのようすをじっと見ていて、従者のひとりに脇腹を小突かれた。
「おお、ソルフィン、元気にしていたか」
　エイリーク卿が、妻の背後に控えた侍女からわが子を受け取ると、父の顔をすっかり忘れてしまっていたソルフィンは、火がついたように泣きだした。
「ソルフィン、ソルフィン、とうさんだよ」
　首もすわらぬころに出征したまま半年以上も会っていない父親の顔を、赤子が覚えていないのは当然と、じゅうぶんにわかってはいても、エイリーク卿は少し傷つき、途方にくれながらわが子をあやす。
「よしよし。おまえのおとうさまなのですよ」
　言いながら、カーラはわが子を受け取り、赤子が泣きやむと、先ほどから気になっていたことを夫に訊ねた。
「あの者は？」
　一行のなかに見慣れぬ若者がいる。この城の者ではないし、夫が治める村の者ですらない。夫が治める村々の男たちが徴兵に応じてこの城に集まったとき、カーラは、領主の妻の務めとして全員をねぎらったが、そのなかに、このような黒髪の者はいなかったように思う。
　まったくのよそ者と見える若者が、夫といっしょにいるのは奇妙なことだ。
「ああ、紹介しよう。彼はレイヴ。しばらくわが城の客となる。レイヴ、これがわが妻、カーラだ」
「お客？」と、カーラが訝しげにレイヴを見た。
　目の前にいる兵士は、身なりからすると、どう見ても歩兵。とうてい、領主の客人となるような身分の者には見えない。
「彼はシグトゥーナ市の者で、王命によって、しばらくわたしがあずかることになったのだ」
「王命によって？」
　カーラはますます訝しげな顔をして、レイヴを見つめた。
　王の命令で庶民の若者が諸侯にあずけられるというのは、どうにも解せない。どう見ても歩兵としか思えないみすぼらしいなりをしているけれど、それは世をしのぶ仮の姿で、ほんとうは身分高い者なのだろうか？
　そう思いながらよく見てみると、ちょっと珍しいほどの美しい若者だけに、なにやら気品があるようにも見えてくる。
「わけを聞かせていただけませんの？」
　そう言ってから、カーラは、まずかったかしらと、ちらりと思った。
　姫君育ちの例にもれず、カーラは、つねに慎ましくあるように、夫の仕事に差し出口をはさまぬようにと教えられて育ったが、あまりその教えを守ってはいなかった。エイリーク卿が「情熱的」と表現したように、もともと感情豊かな性質で、人形のようにおとなしくしているのは性に合っていなかったし、夫を愛し

ていたので、夫に関わりのあることなら何でも知りたいという気持ちが強かったのだ。
　そんな彼女にしてみれば、わけありげな若者をあずかりながらその理由を知らされないというのは、疎外感を感じずにはいられない。
　それで思わず理由を訊ねたのだが、口出しが多いことを亡くなった姑や実家の母によく叱られたことを思い出し、まずかったろうかと考えたのだった。
　カーラは、夫のことを知りたがるのがよくないこととは思っていなかったが、夫を怒らせることは避けたいと思っていた。
　そんなカーラの心配は、エイリーク卿に対してはいらぬことだった。卿は、もともと、存在感のない人形のような姫君は苦手で、カーラの深窓の姫君育ちらしからぬところを気に入り、愛してもいたのだ。
　それで、エイリーク卿は、むろん腹を立てたりはしなかったし、レイヴをあずかることになった経緯を妻に隠しておくつもりもなかったのだが、どう話したものかと、つかのまためらった。さすがに、カーラが腹を立てるか、でなければ心配するだろうと思ったのだ。
　慎重に、へたな省略をせずに話さなければならないが、今は疲れていて、そんな気になれない。
「話すと長くなるから、とりあえず中に入れてくれないか」と、エイリーク卿が言った。
「湯を浴びて、それからお茶を飲みたい」
「まあ、ごめんなさい、お疲れなのに気が利かなくて」
　カーラに促されて、エイリーク卿は城に入り、従者たちは、主君のあとにつづきながら、顔を見合わせた。
　罪人としてあずかったのだから、レイヴは牢に閉じこめておくのが順当だ。とはいえ、エイリーク卿のようすからして、暗くて寒い地下牢にレイヴを入れることはしないだろうと、従者たちは予想していたが、それでも、一室に幽閉するぐらいのことはするだろうと思っていた。
　いくらなんでも、王からあずかった罪人を客人扱いするというのはまずい。
　彼らの困惑は、レイヴにもよく理解できた。彼もまた、まさか自分が客人扱いされるとは、思ってもいなかったのだ。
　戦勝祝いを兼ねたささやかな晩餐のあと、ことの次第を聞いて、カーラは驚いた。魔族の子供を助けたことといい、罪人としてあずかった者を客人扱いしていることといい、さらにはその罪人を晩餐に同席させていることといい、夫のすることは、カーラには理解しがたいことだった。
　この場には、彼ら三人のほか、エイリーク卿とともに出征していた従者ふたりも同席している。彼らなら、従軍の苦労をいたわって、晩餐に同席させるというのもじゅうぶんにわかるのだが。
「陛下は、この者をあずかるよう命じられたが、どう扱えとは指示されなかった。わたしの判断に従ってよいと思う」と、エイリーク卿は主張した。
「それに、この者が罪人になったのは、わたしの身代わりになったからだ。魔族の子供を殺すなと命じたのはわたしなのだから、ほんとうならわたしが罰されるところだったのだ」
　カーラはけっして冷たい人間ではなかったので、レイヴがあくまで罪をひとりで背負おうとしたという話には心を動かされた。が、手放しで感動するほどお人好しでもなく、それに、どうやらこの若者は悪い人間ではなさそうだと判断してもなお、レイヴに対する漠然とした不安は消えなかった。
　だが、ともあれこの男は夫の部下であり、夫に対しては誠実にふるまっている。ならば、むげに冷たくもできない。
　エイリーク卿の思いやり深いところ、人柄の温かさは、カーラが愛する性質でもあったので、それを否定することはできなかったのである。
「わかりました。この人を客人としてもてなしましょう」
　ついにカーラは承知し、エイリーク卿はうれしそうにほほえんだ。

「ありがとう。おまえならわかってくれると思った」
「でも、それにしても、どうして魔族の子供を助けたいなどと思ったのです？」
　エイリーク卿はちょっと言葉につまり、それから、しぶしぶといったようすで答えた。
「ラーブを思い出したのだ」
「オーラーブさま？　お年が全然違うじゃありませんか」
「あれがこの城を出ていったのが七つのとき。あの魔族の子供は、ちょうどそのぐらいの年だったのだ。外見の話だがな」
「ならば、ずっと年上のはずですわね。魔族は年のとりかたが人間とは全然違うのでしょう？」
「ああ、わかっている。それはよくわかっているのだが……。外見の年のころとか、今にも泣きだしそうなようすが、あのときのラーブを思い出さずにはいられなかったのだ」
「オーラーブ？」と、レイヴが聞き咎めた。
「この国の王子がそういう名前ではなかったか？」
　その名前は、のちにレイヴにとって重要な意味をもつようになるのだが、このときの彼には知るよしもない。
「王太子殿下その人のことだ」と、従者のひとりがレイヴにささやいた。
「王太子殿下は閣下の弟君で、王の養子になられたのだ」
「ふうん。でも、また、なんで？　弟に会わせてもらえないのか？」
「まさか」と、エイリーク卿が答えた。
「王宮に伺候したときには、毎回あいさつをしているさ。年に一度か二度のことだがな」
　エイリーク卿の苦い口調に、レイヴは口をつぐんだ。
　レイヴはもともと、他人の詮索をあまりしたがる性格ではない。ただ、幸福そうに見えたエイリーク卿にも何かつらい思い出がありそうだと気づき、それが心に残ったのだった。

その日から、エイリーク卿の城でのレイヴの生活がはじまった。
レイヴは、客用の寝室を一室あてがわれ、生まれてこのかた眠ったことのないようなふかふかのベッドで眠り、今までいちども食べたことのないようなごちそうを、毎日のように口にした。
エイリーク卿は、城も食事もその他の生活も、けっして華美なものではなく、王家の血に連なる最有力諸侯という身分にしては、むしろ質素な暮らしをしていたが、それでも、住む家もなく、ときには空腹をがまんしながらその日暮らしをしてきたレイヴにすれば、夢のようにぜいたくで安楽な生活だった。
衣服もまた、それまで着ていたものは行軍のあいだに汚れ、ぼろぼろになっていたので、エイリーク卿のお古を何着か渡されたのだが、いずれも、レイヴが一度も身に着けたことのないような上等の品だった。
それらの衣服を身に着けたレイヴは、こそどろのようなことをして暮してきた人間とはとても思えず、口を閉ざしてさえいれば、じゅうぶんに騎士階級の者に見えた。それどころか、騎士のなかにも品のよくない者はいくらでもいたので、そのような者たちに比べれば、レイヴのほうがはるかに貴公子らしく見えた。
そして、そういった恵まれた生活以上に今までの経験とは違っていて、レイヴをとまどわせたのは、エイリーク卿の態度だった。
エイリーク卿は、何かとレイヴによく話しかけ、行動をともにしたがった。さすがに自分の治める村々を視察してまわるときには、レイヴを残していったが、領地のうちにある森や野を見てまわるときには、たいがいレイヴを誘った。
レイヴは、あまり人といっしょに行動したがるたちではなかったうえ、黒髪を魔族のようだといわれて敬遠されてきたので、ずいぶん長いあいだ、そんなふうに自分に親しく接してくる者に出会ったことがなかった。
他人とのふれあいをまったく知らずに生きてきたわけではない。落ち着いた暮らしをまったく知らないわけでもない。
少年のころ、彼に手を差し伸べてくれた人たちがいた。いや、正確には、彼らは人ではなかったのだが。
彼らとともに暮らした短いあいだ、レイヴは、人の情愛も、飢えの心配をせずともよい暮らしも知った。
だが、レイヴは、物にも愛情にも恵まれたその暮らしに適応しきれなかった。そのうえ、つかのま知ったその夢のような世界は、あまりにも悲惨な終わりを遂げたのだ。
近ごろではめったに思い出すことのなかったその記憶を、レイヴは、エイリーク卿の城にきてから、よく思い出すようになった。
城での暮らしを夢のようだと思えば思うほど、かつての記憶がよみがえる。かつてと同じ落ち着かない気分と、過去のような悲惨なことが起こるのではないかという恐怖とともに。
自分が幸福な暮らしに適応しきれないのはしかたがない。幸福な暮らしからはみ出してしまうのも、追い出されてしまうのもしかたがない。けれども、あんな失い方だけはごめんだ。
レイヴがときどき沈みがちになることに、エイリーク卿は気がついていた。だからこそよけい、レイヴのことが気になり、心配し、頻繁に外に連れ出したのだともいえる。
それで、エイリーク卿は、ある日、レイヴを連れ出したときに訊ねた。
「浮かないようだが、ここでの暮らしに何か不満があるのか？　それとも、拘束されているという状態が不安なのか？」
「いいや。拘束もなにも、全然拘束されているという感じはしないし、こんなによくしてくれるのに、不満なんてあるわけはない。ただ……」

「ただ？」
「ここの暮らしは夢のようで、幸福で……。だから不安になる。おれは、幸福ってやつに慣れていないし、それに、ちょっと、昔のことを思い出して……」
「昔のこと？」
　黙りこくって顔をそむけたレイヴに、エイリーク卿は、聞かないほうがよかったろうかと気を遣った。
「言いたくなければ言わなくてもいいが」
「いや」
　レイヴは、視線をぼんやりと遠くにさまよわせながら、一度しか他人に語ったことのない話をした。
「おれは、昔、魔族の一家に世話になったことがあるんだ。もう八年ほど前のガキのころの話だが」
　エイリーク卿は驚いてレイヴを見た。魔族と人間が交じって暮していた時代ならいざ知らず、対立が深まってから、魔族と人間の子供とのあいだにそんな交流があったことも驚きだが、へたをすれば間諜の疑いをかけられかねないその事実をレイヴが口にしたことにも驚いた。そして、そんな秘密をレイヴが打ち明けてくれたことを、うれしくも思った。
「彼らは病気のおれの手当てをしてくれて、元気になってからも、家にいたらいいと言ってくれた。でも、おれは、なんだか落ち着かなくて、彼らのもとを去ってしまって……。そして、次に見たとき、彼らは死体になって、さらし者になっていた」
「そういえば……」と、エイリーク卿は、記憶をまさぐりながら言った。
「国内での魔族狩りの最後あたりに、シグトゥーナの近くで魔族の隠れ里が見つかったとかいうのがあったな。あれは、たしか八年ぐらい前のことだったか」
「そうだ。そのときの話だ」
　レイヴはエイリーク卿のほうをふり返った。
「どうして彼らを狩ったのだ？　この国に昔からいた魔族たちは、魔界からの侵攻を迷惑がっていた。実際、昔は、彼らは人間の軍とともに魔界軍と戦ったのだろう？　人間のほうが彼らを受け入れさえすれば、喜んで力を貸してくれたのに」
　言ってから、レイヴは、自分でも驚いた。それは、親切な魔族の一家が惨殺されたときから漠然と感じていたことだったが、こんなふうに政治的な意見として考えたり、人に話したのは初めてだ。
「そうだ、手を組めばよかったんだ。そうすれば、こんなに毎年遠征する必要もないし、魔界との戦いだって、ずっと楽なものになったのに」
　現在、人間たちの十二王国に敵対しているのは、魔界から侵攻してきた魔族たちだけではない。長らく人とともに暮らしてきた魔族たちも、魔族狩りを逃れて、やむなく北に逃れ、魔界の魔族たちと合流しているのだ。
「わかっている」と、エイリーク卿は答えた。
「魔族たちは敏捷で、すぐれた戦士たちで、頭がよくて、かつては人とともに住み、人間の社会を支えてくれてすらいた。彼らの力を借りることができれば、大きな戦力となっただろう。魔族狩りはまちがいだった。理性的に考えればたしかにその通りだ。だが、恐怖が理性を圧倒したのだ」
「恐怖か。彼らもそう言っていたな」
「そうか。……残念なことだが、今となってはもうどうしようもない。恐怖に支配されているのは人間だけではない。魔族たちもまた、人間を恐れ、不信を抱き、憎んでいるのだからな」
「それはわかっている。ここに」と、レイヴは自分の胸に手を当てた。
「今も傷痕が残っている。その魔族狩りのあと、生き延びた者がいて、おれを殺そうとした。その痕だ」
「よく無事だったな」

「魔族狩りの兵士たちがちょうど通りかかり、そいつを殺した。おれは彼らに助けられたんだ。皮肉なことにな」
「無事でよかった。よかったと言うと、おまえは怒るかもしれんが」
「怒りはしないが……。今でも、よかったという気分にはなれないな。そいつらにだけは助けられたくなかった。でも……」
「でも？」
「おれは彼らを憎んで斬りかかったけど、彼らはおれを憎まなかった。少なくとも彼らのひとりは。おれが魔族に殺されかけた恐怖で錯乱しているだけだと言って、傷の手当てをしてくれようとした。おれは彼らを憎めなくなった。よけいやりきれなかった」
　しばらくの沈黙ののち、エイリーク卿が口を開いた。
「あのとき、わたしの命令どおりに魔族の子供を助けたのは、そういうことがあったからなんだな」
「ああ。魔族が憎いという気持ちは、おれにはあまり湧かないからな。……それに、あの子供の風情と、あんたの言葉が、あの魔族の一家に助けられたときのことを思い出させたし……」
「わたしの言葉？」
「子供を殺すなと言っただろう？　病気のおれを見つけたとき、魔族のなかには、おれを殺したほうがいいと言ったやつもいたんだ。でも、子供を殺すなと言って、助けてくれた人がいた」
「そうか」
「あんたのほうはどうなんだ？　どうしてあの子供を助けようという気になった？　弟を思い出したとか言っていたが」
　そう言って、レイヴは、オーラーブ王子の話題が出たときのエイリーク卿のつらそうな様子を思い出し、つけ加えた。
「悪かった。立ち入ったことを聞いてしまった」
「いや、いい」
　エイリーク卿はほほえんだ。
「わたしの父には最初の正妻のほかに三人の愛妾がいて、わたしの母はその中でもいちばん年上で、父に仕えるようになったのもいちばん早かった。だから、父と正妻が神託に従って離縁したとき、自分が正式に後妻に迎えられるのではないかと期待していた。だが、父が次に正妻にしたのは、いちばん若くて、いちばん身分が低くて、いちばんあとから父のそばにあがった女性だった」
「ふうん。よくある話だな」
「ああ。だが、じつはよくある話ではなかった。それを知っていたら、オーラーブにつらくあたったりしなかったのだが」
　レイヴがけげんそうに首をかしげ、エイリーク卿は言葉をつづけた。
「父の最初の妻には子供がおらず、三人の愛妾とのあいだに息子がひとりずついた。わたしがいちばん年上で、父に信頼され、期待されてもいたので、当然、自分が跡を継ぐのだと思っていた。だが、父が別の女性を正妻とすれば、その正妻の息子が父の後継ぎになる。父がわたしの母ではなくラーブの母を正妻に選んだとき、父は後継者として、父についてずっと学んできたわたしではなく、まだ五歳のラーブを選んだのだ。そう思うとラーブが憎くて、近づいてくれば冷たくはねのけ、つらくあたった。十三も年下の幼い子供に、ひどい仕打ちをしたものだ」
「でも、よくあることなのだろう？　家とか財産とか、母親どうしの確執とかがからみあって、腹違いの兄弟がしっくりいかないってのは」
「ああ。だが、年の近い兄弟ならともかく、幼い子供相手にやることじゃなかった。しかも、父がラーブの

母を正妻に選んだのは、彼女をとくべつ愛していたからではなかったし、ラーブを後継ぎにしたかったからでもなかった。ラーブは王家に捧げられた子供だったんだ」
「ああ、そうか」と、レイヴは合点した。
「王の養子にするために、母親の身分を引き上げたのだな」
「そうだ。ラーブは、たった五歳で、アーストリーズ王女の夫となることを決められてしまったのだ。それを知ったのは、二年後に父が亡くなったときだ。喪が明けるか明けないうちに王家から迎えがきて、ラーブを連れていった。まだ七つの幼い子供のことだから、いきなり母親と引き離されて泣き叫んでいた。母親も、あと何年か待ってくれとか、同行を許してくれと懇願していたが、その願いは許されなかった。そのときのラーブの泣き顔がずっと心の片隅に残っていて……。あの魔族の子供を見たとき、それと重なったのだ」
「解せないな。あの王さまは、まだまだ子供ぐらいつくれるだろうに。どうしてそんなにさっさと、王女の婿に跡を継がせることに決めたんだ？」
「くわしいことはわたしも知らないんだが……。なにか神託があって、あの子が次の王として神の意にかなったらしい。たぶん、父が最初の妻と離縁することになった神託とも、無関係ではないと思う」
「身分の高い人間のやることはわからんな。神託で離婚したり、五歳の子供の結婚を決めたり……。あんたも神託なんて信じているのか？」
「いや。だが、神にでもすがりたいという気持ちはわからなくはない。それほど魔界からの侵攻は脅威だし、人々は戦いに疲れはてている。父の最初の正妻だった人は、離縁したあと巫女になったのだが、少なくともその人と亡くなった王妃殿下は、ラーブがいずれ十二王国すべてを救うことになると信じておられた」
「ちょっとかわいそうだな、そのオーラーブって王子。母親と引き離されたり、勝手に結婚を決められたり、わけのわからん期待をかけられたり」
「ああ」
「だが、あんたが支えてやれるんだろう？」
「まさか」
　エイリーク卿は苦笑した。
「さんざん冷たくしておきながら、弟が王子に出世したからといって、そんな調子よく、親しくなんかできるものか」
　レイヴは言葉に窮した。たしかにそれはその通りだった。それで、別のことを訊ねた。
「もうひとり弟がいるんだろう？　そいつはどうなんだ？　やっぱりオーラーブ王子としっくりいっていないのか？」
「うーん、どうなのかな。バウズはずいぶんラーブをいじめていたが……。わたしでさえ思わずたしなめたほどいじめていたが……。だが、今はどちらかというと、ラーブに近づきたがっているな。だが、それがほんとうにラーブのことを思ってかどうかはわからん。わたしはバウズがどうにも苦手で、彼を信用できないんだ」
　エイリーク卿は肩をすくめて、自嘲的に言った。
「わたしはよくよく兄弟とうまくやっていくのが苦手らしいな。弟がふたりいるのに、どちらともうまくやっていけないのだから」
「オーラーブ王子は？　子供のときのことを恨んでいるのか？」
「いいや。たぶんな。あれはやさしい子供で、さんざん冷たくしたわたしやバウズを、兄として立ててくれる。だが、どちらに対しても気を許してはいないようだな。無理もない話だが」
「だが、あんたはもうひとりの弟がひどいいじめ方をすれば、止めたりもしていたのだろう」

「それはまあ、そうだが……」
「あんたはいいやつだ。オーラーブ王子がそれに気づかずにいるのなら、王子は損をしている。味方になるべき魔族まで追い払ってしまった人間たちのように」
「すごいたとえだな」
　エイリーク卿は声をあげて笑った。
「だが、そうだな。魔族と人とのあいだのような愚かな決裂は避けたいものだ。せめて個人的な人間関係ではな」
　それからいくらもしないうちに自分がその愚を冒すことになるとは、エイリーク卿には知るよしもないことだった。

レイヴは、表向きは囚われ人でも、出歩くのは自由だった。そんなレイヴを、城の者たちはうさんくさく思っていた。従者たちや奥方の侍女たち、それに従軍していた村人たちの口から、彼が軍の掟を破ったという話を聞いていたので、心配だったのだ。それに、魔族の髪を思わせるレイヴの黒髪もまた、彼らがレイヴを敬遠する理由となっていた。

奥方のカーラもまた、例外ではなかった。というより、城に住む者たちのなかで、レイヴにもっとも不安を感じていたのは、カーラその人だった。

レイヴが罪人だということ以上にカーラを不安にさせたのは、夫のレイヴに対する傾倒ぶりだった。

エイリーク卿には、その身分の高さから、忠実に尽くしてくれる部下には恵まれていても、対等の友だちづきあいができるような友人はほとんどいない。

親友と呼べるほど仲のよかった乳兄弟も、親しかったいとこも、魔族との戦いで戦死しており、異母弟ふたりとは疎遠な間柄。騎士のなかでも対等に近い身分の者たちは、権勢争いに身をやつしており、とても友人づきあいなどする気になれない。エイリーク卿が友人と呼べるのは、いま生きている人間のうちでは、カーラの父と兄ぐらいのものかもしれない。

腹心の部下の騎士たちを心から信頼していてもなお、エイリーク卿は、心のどこかで対等の友人を欲する気持ちをもっていたので、他人の目には不遜と映るレイヴの態度を新鮮に感じ、親友を得たことを喜んでいた。

そんなエイリーク卿の態度は、カーラには、夫を奪われたように感じられたのだ。

そもそもカーラは、結婚以来、戦争に夫を奪われつづけているように感じていた。

なにしろ、夫は、一年の三分の二近くものあいだ戦争に出ていき、ともに過ごせるのは晩秋から春先までの短いあいだだけ。それはもちろんエイリーク卿ひとりのことではなく、騎士と平民とを問わず、戦争に行ける年齢の多くの男たちにいえることだったのだが、自分ひとりの不幸ではないからといって心が慰められるべくもない。

「短いあいだしかいないからこそ、毎年新婚のような気分が味わえるのよ」

カーラの母や姉は、自分自身に言い聞かせるつもりもあって、よくそう口にした。おそらくそれは一面の真実だったのだが、母や姉よりはるかに熱い魂をもつカーラの慰めとはならなかった。

一年じゅう夫とともにいられる夫の従者たちを、カーラは内心うらやましく思い、嫉妬すら感じていた。生死を分かち合ってともに戦う者たちの絆は肉親でも妻や恋人でも立ち入れぬぐらい強いのだと、父や兄に聞いたことがあったので、なおさらだった。

それでも従者たちは、身分の違いもあって、夫からあるていど距離をおいている。それに、戦いのあいだ彼らが夫を守ってくれていることもよくわかっていたので、彼らに感謝こそすれ、妬むのは筋違いだともよくわかっていた。

だが、レイヴは違う。罪人のくせに、夫に親友か弟のような扱いを受け、カーラが夫とともに過ごせるはずの時間を奪っている。夫は、夫婦でともにいるときより、レイヴとともにいるときのほうが多いような気がする。

それでも、それは、なにごともなければ、蜜月をじゃまされた妻の不満に終わったかもしれない。もしも、レイヴの身を案じた者の、皮肉にして間の悪いお節介さえなかったならば。

そのできごとは、レイヴがエイリーク卿の城にやってきて二十日ほど経ったときに起こった。

「レイヴ」

城の庭にひとりぼんやりとたたずんでいたレイヴは、ふいに名を呼ばれ、ふり向いて驚いた。フード付きの外套をまとった十歳ぐらいの少女がたたずんでいたからである。
はじめ、レイヴは、カーラの親族か、でなければ使用人のだれかの家族が訪ねてきたのかと思った。そうであってみれば、レイヴの名を知っていてもふしぎではない。
だが、そうではないことはまもなくわかった。
「心配したわ、レイヴ。ひどい目に遭ってやしないかと思って」
レイヴはけげんそうに少女を見た。まるで知人のような言い方だが、覚えがない。知り合いだとすれば、シグトゥーナ市の者のはずだが、この少女に見覚えがないだけでなく、自分を心配してくれるような者の心当たりもない。シグトゥーナ市では、彼はつねに孤独だったのだ。
だが、北からの帰還の旅のとちゅう、心配してようすを見にきた者がふたりいたことを、レイヴは忘れてはいなかったので、自分のことを気にかけている者がひとりもいないと言い切る自信もない。
「すまない。だれだったか思い出せないんだが……。シグトゥーナ市の者か？」
「違うわ。わからなくても無理もないけど」
そう言うと、少女はフードをはねのけた。豊かな金髪をかきあげ、耳をあらわにすると、人間の耳にしては大きく、先端がロバの耳のように尖っているのがわかる。
レイヴは驚いてその魔族の少女を見つめた。そのぐらいの年ごろの魔族の少女を、レイヴは昔知っていた。だが、その少女のはずはない。惨殺されて木に吊された彼女の亡骸を、レイヴはたしかに八年前に目にしているのだから。
どうしてこんなところに魔族の少女がいるのか、自分を知っているのか、レイヴにはさっぱりわからなかった。
「おまえはだれだ？」
「わたしはオレイン。あなたに助けられた者よ。こうすればわかるかしら」
少女の金の髪がたちまち黒く変わり、青かった瞳が緑の色彩を帯びる。染め粉で髪を染めたのかと思っていたが、魔法で変えていたのだ。
魔族のなかには、ときおりこのような魔法を使える者がいる。十人にひとりかふたりのことで、魔法とはいっても、たいがいはたいしたものではなかったが、それでも、それは人に魔族を恐れさせるのにじゅうぶんだった。
そして、この幼さでやすやすと姿変えの魔法を使うところからすると、このオレインと名乗った少女は、魔法を使える者のうちでも、かなり能力の高い者にちがいなかった。
あっけにとられていたレイヴの表情がたちまち引き締まり、戦士のそれになる。その変貌にオレインはたじろいだ。
「あなたも魔族を憎んでいるの？　自分たちとは違う者だというだけで？」
「べつに憎んではいないが、身を守るのに戦う必要があれば戦う。おまえは何者なのだ？」
「あなたに助けられた者よ」と、オレインは繰り返した。
「あの恐ろしい戦いのあと、恐ろしくて野蛮な人間たちに追われていたときに」
言われてレイヴは、オレインの容貌が、たしかに魔族との戦いのときに助けた子供に似ていることを認めた。が、年齢が違う。
「あの子供の身内の者なのか？」
「いいえ、あなたに助けられた本人よ」
「嘘をつくな。あの子供は、どう見ても七、八歳ぐらいに見えた。まだ性も分化していない年齢だった」
「ええ、そうよ。それから急いで年をとったの」

「そんなばかな話を信じると思うのか？　魔族が年をとるのが遅いということは、おれだって知っている。人間より年をとるのが早い魔族なんて聞いたこともない」
「魔族の年のとり方はみんな同じだと思っているでしょう？」
「違うのか？」
「違うのよ。ことに強い魔法の力をもつ者はね。おとなになれば、それだけ魔法の力が強くなって、制御するのが難しくなる。だから、本能的にゆっくり年をとるの。わたしは五十歳ぐらいに見えていたけれど、ほんとうは百十八歳。人間でいえば十七歳ぐらいよ」
「子供じゃなかったのか」
　だまされたような気分になりながら、レイヴが言った。
　相手が十七歳の少女でも、助けてやろうという気を起こしたかもしれないが、七歳の子供に化けている十七歳の魔女なら話は別だ。そうと知っていれば、助けようという気を起こさなかったような気がする。
　そんな彼の心のうちを知ってか知らずか、オレインは「ええ」とうなずいた。
「そんなふうにゆっくり年をとった者は、ほんとうに年をとるのが必要になったときには、長く成長がとまっていた分、年齢相応にまで早く年をとることができると言われているの。めったに起こらないことで、本気にしていなかったのだけど、わたしには訪れたのだわ。あなたに助けられたときからね」
「どういう関係があるというんだ？　おれが助けたことと年をとることとに？」
「年齢相応のわたしの力が必要とされているからだと、仲間たちは言ったわ。魔族のためにね。でも、わたしは、あなたを助けるためだと思っている。そして、あなたと釣り合うためではないかとも思っている。わたしの心が、あなたの力となること、あなたと釣り合うことを真に欲しているからだ、と」
「いったい何が言いたいんだ？」
「女の口から言わせる気なの？」
　いっぱしのおとなの女のような口調でオレインが答え、レイヴが迷惑そうに眉をひそめた。
「悪いが、子供を相手にする趣味はない。誘惑したいなら、そういう趣味のやつをあたれ」
「子供ではないと言っているでしょう。わたしは百十八歳よ。人間の年齢にあてはめたって、十七歳にあたるのよ。あなたとちょうど釣り合う年齢ではないの？」
「十歳にしか見えなければ、十歳と同じことだ」
　そのとき、かさりとかすかな物音がして、レイヴとオレインが同時にふり返った。ふつうの者なら気づかなかったにちがいないほどのかすかな音だったのだが、こそどろのような暮らしをしてきたレイヴは物音に敏感だったし、魔族はもともと人間より聴覚にすぐれているので、ふたりとも、木の葉がかすかにすれただけのその物音を聞きつけることができたのだ。
　ふたりがふり向いた先にいたのは、カーラの侍女だった。
　怯えきってオレインの魔族特有の闇色の髪を見つめていた侍女は、ふたりと視線があって、「ひっ」と悲鳴を上げ、あとずさった。
　オレインが、護身用にと隠しもっていた短剣を抜く。人を殺したことなどなかったが、見られた以上、口を封じるためにはやむを得ないと腹を決めていた。
　侍女は、逃げようとあとずさったとき、木の根につまずいて尻餅をついた。そして、そのまま腰を抜かし、怯えきった視線をオレインに向けた。
　オレインが侍女に歩み寄ろうとしたとき、レイヴがすばやく彼女の手首をつかみ、腕をねじり上げた。短剣がぽとりと地面に落ちる。
「何をするの！　その女の口を封じなければいけないのに」
「この前は無力な子供だと思ったから、思わず助けてしまった。だが……」

　レイヴはオレインの腕をねじりあげたまま、短剣を拾い、その刃を彼女の首筋に当てた。
「子供ではなくて、いっぱしの戦士だというなら、話が違う」
「わたしを殺すつもり？」
　震え声で、オレインが言った。
「わたしを助けたためにあなたが捕まったから、ひどい目に遭ってやしないか、心配でようすを見にきたのよ。村の連中やなんかが、あなたのことをひどい言い方していたから、危険を冒してこんなところまで忍び込んだのに。なのに、あなたは、人間の味方をするの？」
「味方もなにも、おれは人間で、人間と魔族は戦争中なのだぞ」
「長老たちもそう言ったわ。気まぐれで逃がしてくれたからといって、人間なんて信用するなって」
「その忠告を聞くべきだったな」
「そうね。……でも変ね。こういう状況なのに、あなたを嫌ったり憎んだりする気持ちは起こらないわ。ここで殺されたとしても、最期の瞬間まであなたを愛しているわ」
　いったんは油断ならなく見えていた魔族の少女が、再びませた子供のような顔を見せたので、レイヴは調子が狂って、彼女の腕をねじっていた手を離した。
「いったいおまえは何をしにきたんだ。人間の偵察か？」
「まさか。あなたを助けにきたのよ」
「迷惑だ。さっさと北に帰れ」
「あなたを残して帰れないわ。だって、その女はあなたのことを誤解してる。あなたのことをどう証言するか、わかったものではないわ。ここに残ったらひどい目に遭うわよ」
「残らなかったら、エイリーク卿がひどい目に遭うかもしれん」
「どうでもいいでしょう、そんな人のことは」
「恩人のことをそんなふうに言っていいのか？　最初におまえを助けようと言い出したのは、エイリーク卿なのだぞ」
「うそよ、だって……」
　言いながら、オレインは記憶をまさぐった。言われてみれば、あのときいっしょにいた騎士が、「殺すな」と叫んでいたような気がする。
「でも」と、オレインは自信なげに言った。
「実際にわたしを助けてくれたのはあなただわ」
「いいから、さっさと帰れ。見つかれば殺されるぞ」
　オレインは、今にも悲鳴を上げそうな侍女をちらりと見ると、身をひるがえした。
「生きていてね、レイヴ。きっとよ」
　そう言い残すと、魔族の少女はいずこかに姿を消した。
　それを見送り、レイヴは侍女のほうに目を向けた。
「立てるか、あんた」
　だが、侍女は、レイヴを魔族の一味だと確信してしまっており、怯え切っていた。
　それで侍女は、レイヴが助け起こそうと手をのばしたとき、けたたましい悲鳴を一声上げると、泡をふいて気絶した。
　困ったレイヴが、とりあえず彼女を城のなかに運びこもうと抱き上げたとき、悲鳴を聞きつけた使用人たちが駆けつけてきた。
「どうした？」
「叫び声を上げて気絶したんだ」

「ああ、ヒステリーだな。身分の高いご婦人にはよくあるんだ」
　皆はそう言って納得した。それで、レイヴは、エイリーク卿が村の視察に出かけて留守だったこともあって、侍女が目覚めて騒ぎだすまで、オレインのことをだれにも語らなかったのだった。

エイリーク卿は、留守中に起こった騒ぎを聞いても、レイヴの説明を聞くと、彼を信じると皆に宣言した。しかし、そのじつ、かすかなわだかまりが心に残った。

けっして皆が主張するように、レイヴが魔族の間諜だと疑っていたわけではない。過去の打ち明け話を聞いていただけに、彼が二心のある人間ではないということに確信があった。

だが、過去の打ち明け話を聞いていただけに、レイヴの心の動きに漠然とした不安を感じたのだった。

はじめ、レイヴが魔族の子供を助けた動機について、エイリーク卿は、漠然と、彼が心のやさしい人間だからだろうと思っていた。

だが、エイリーク卿が魔族の子供を助けようとした動機に、心のうちにわだかまっていたオーラーブ王子への罪の意識があったのと同じように、レイヴには、魔族の一家との交流と、それにまつわる悲しい過去があったのだ。

あのとき、王がはからずも疑ったように、レイヴはたしかに魔族に肩入れする心情を持ち合わせている。おそらく、人よりは魔族に好感情をもっている。

いくら子供の姿をしているとはいえ、そのオレインという名の魔族の少女は、自ら十七歳にあたると明言しており、きわめて力の強い魔女なのだ。

なのに、レイヴは彼女を逃がした。そう、逃がしたのだ。侍女が目覚めるまでレイヴが沈黙していたのは、彼女に逃げる時間を与えるためだというのは、明らかなのだから。

レイヴのその心情を、エイリーク卿は責めるつもりはない。レイヴは、病気のときに魔族の一家に助けられたと言っていたが、それは、魔族の一家が病気の人間の子供に手を差し伸べるまで、人間のうちに、彼に手を差し伸べた者がひとりもいなかったことを意味している。おそらく彼は、人間からはひどい扱いを受けてきたのだ。

彼が人より魔族に好感情をもったからといって、責められはしない。

だからこそ、エイリーク卿は、レイヴの心情に不安を感じ、それにまた、いまだに彼の心に重きをなす魔族の一家に嫉妬を覚えたのだった。

さらに、レイヴが沈みがちで、城での生活を楽しんでいないように見えることが、その不安と嫉妬を増加させていた。

レイヴが見せる誠意と好意は、エイリーク卿の好意に応えようとしているだけで、彼自身は、エイリーク卿が彼に抱いているような友情も、いっしょにいて楽しいという気持ちも持ってはいないのではないだろうか。

そんな疑惑を、エイリーク卿は抱かずにはいられなかったのだが、それを表には出さず、わきに退けた。もしもその通りだとしても、レイヴに非があるわけではなく、責めるいわれは何もない。なのに、そんなわだかまりをもつのは醜いことだと、エイリーク卿は思ったのだった。

カーラはカーラで、そんな夫の寛容さに不安を抱かずにはいられなかった。

彼女は気丈なたちだったが、魔族の少女が自分の城の庭園にまで入りこんでいたという事実には、城に住まう者たちみんなと同じく、恐怖を覚えずにはいられなかったし、レイヴの行為は、明らかな裏切りだと感じた。

そんな裏切りを知りながら、なおレイヴをかばおうとする夫の態度は、あまりにも異常に思える。

この城には妻も子供もいるというのに、あんな男を住まわせておいて心配ではないのだろうか？　それとも、夫にとって、妻も息子もあの男ほどの値打ちがないのだろうか？　妻子より、あの忌ま忌ましいほど

美しい男がだいじなのだろうか？
　不安と恐怖と嫉妬のうちに、カーラはひとつの決意をかためた。
　あの魔族と通じた男を、なんとしてでも排除しなければならない。自分と、夫と、わが子を守るために。あの男が手引きしなければ、魔族の娘だって入ってくることはできないだろう。
　そこで、ある夜、カーラは、短剣をしのばせると、レイヴにあてがわれた部屋を訪れた。
　深夜の女性の訪問に、レイヴは驚いたが、相手が城の女主人とあっては追い出すわけにはいかない。
「わたしの用件はわかっているわね」
　真冬の北風よりも冷たい声で、カーラが言った。
「見当はつくが……。城から出ていくわけにはいかない。そんなことをすれば、エイリーク卿が……」
　エイリーク卿が王に咎められると、レイヴは言いたかったのだが、カーラはみなまで言わせなかった。
「そうでしょうとも。ここにいれば、何不自由ない暮らしができるものね。エイリークはあなたに夢中で、なんでもあなたの言いなりだし。まるで、色小姓に夢中のある種の殿方のように」
　言いたかったこととまったく違う言葉が口からあふれ、情けなさで、カーラの目から涙があふれた。
「あんたは、自分の夫のことをそんなふうに思っているのか？」
　レイヴの声が険しく尖る。
　カーラはそれには答えず、いきなり短剣で斬りかかった。反射的に、レイヴはそれをよけ、短剣を叩き落とす。何も考えたわけではなく、戦いのあいだにいやおうなく身についた体の動きだった。
「何を誤解しているのか知らんが、エイリーク卿は、帰りの旅のあいだ、ずっとあんたのことばかり話していた。あんたをひどくだいじに思っているんだ。どうしてそれを信じない？」
「そうよ。あの人はわたしをずっとだいじに思ってくれていた。でも、今は、わたしよりあなたをだいじに思っているように見えるわ。でも、もし……」
　カーラは狂おしく床の短剣に目を向けた。
「もしも、わたしがあなたに殺されたということになったら、あの人はわたしのためにあなたを憎んでくれるかしら？」
　言うなり、カーラは短剣に飛びつこうとした。レイヴの脳裏に、過去の忌まわしい記憶がよみがえる。
　無残な亡骸。友だちだと言ってくれた人の慟哭と、その人から向けられた憎悪と殺意。
　レイヴは夢中でカーラに飛びつき、彼女の行動の自由を奪おうとした。
　カーラは床に引き倒され、はずみで、スカートがテーブルの装飾に引っかかって破れた。
　仰向けに組み伏せられた女と、その上にのしかかっている男。それがはた目にどういうふうに映るか、レイヴは気づかなかったが、カーラは気がついた。
　命を賭してもこの危険な男を排除しようという狂気じみた思いのかわりに、カーラの頭のなかに、理性的とはいえないながら、それなりに狡猾な計算がよみがえった。
　カーラはけたたましい悲鳴を上げた。レイヴはたじろいだが、彼女の悲鳴を、手を離させるための威嚇と受け取ったので、彼女を組み伏せたままでいる。
　やがてどやどやと、悲鳴を聞きつけた者たちが駆けつけてきた。まず夜警の兵士たちが、ついでエイリーク卿の従者の騎士たち、老いた執事、さらにエイリーク卿や侍女たちも、レイヴにあてがわれた部屋に駆け込んできた。
「この者がわたしに乱暴しようとしたのよ」
　避けてペチコートののぞいたスカートが、カーラの主張を裏づけている。
「なんてやつだ」
　騎士や兵士たちが憤慨するなか、老執事がおもむろに口を開いた。

「しかし、奥さま。こんな深夜に男の部屋をどうして訪れたのです？」
　執事は、子供のころの記憶として、人と魔族が仲よく暮らしていた時代のことを知っていたので、城の者たちのうちでは、比較的、魔族に対してもレイヴに対しても偏見が少ない。それよりも、女性の慎ましさや貞淑さについて頑固な偏見をもっていた。
　それに、レイヴの美貌、それもなよなよと弱々しい美しさではなく、戦いに慣れた者特有の危険な緊張感をはらんだ美貌は、女性を惹きつけるにじゅうぶんだと、執事は考えた。
　それで、執事は、けっしてレイヴを信用していたわけでも、好感をもっていたわけでもないのだが、彼に対して以上に、深夜に男の部屋を訪れた奥方に対して不信感を抱いたのだった。
「まるで彼が乱暴するのを期待していたかのように見えますが」
　執事の言葉に、カーラは屈辱と怒りで顔を赤く染めた。
「どういう意味？　わたしがこの魔族の間諜を誘惑しようとしたとでも言うの？」
「そこまでは申しておりません。ただ、いささか軽率かと……」
　丁寧ながらも刺をふくんだ執事の言葉を、カーラが遮った。
「わたしはこの男に出ていくように言いに来たのよ」
「それは事実だ」と、レイヴが割り込んだ。
「奥方に誘惑された覚えはない」
「では、カーラを組み敷いていたのは？」
　エイリーク卿がはじめて口を開いた。
「おまえはカーラに乱暴しようとしていたのか？」
　違うという言葉を、レイヴは飲み込んだ。帰還の旅のあいだ妻のことをうれしそうに語っていたエイリーク卿の姿を思い出し、ついで、いとこに罪を背負わせたくないと言っていたグンナル王の言葉を思い出した。
　魔族の子供を逃がした責任を問わなければならなくなったとき、グンナル王は、叔父の息子であるエイリーク卿の責任にしたくないと言っていた。同じように、エイリーク卿は、愛妻に非があると思いたくはないだろうし、みなの前で妻を断罪したくもないだろう。
　それに、もしも仮に、エイリーク卿が、妻よりもレイヴの言い分を信じたとすれば、カーラは夫の愛情を疑うに違いない。先ほど口走っていた言葉からして、すでに夫の愛情に一抹の疑惑を抱いているようだったではないか。
　カーラは、あまり賢明とも理性的とも言いがたい性質のようだが、それでも、彼女の行動が夫への愛情に発しているのは明らか。そして、エイリーク卿もまた、妻を深く愛している。
　なのに、レイヴの言葉ひとつで、彼らのあいだに溝が生まれてしまうかもしれないのだ。
「奥方に非はない」
　エイリーク卿から顔を背け、絞りだすようにつぶやきながら、夢は終わったのだと、レイヴは思った。
　物にも人の情にも満たされた夢のような日々だったが、それは終わったのだ。
「こちらを向け」
　エイリーク卿は、レイヴのあごをつかんで、むりやり自分のほうを向かせた。レイヴに対してはむろん、ほかのだれに対しても、エイリーク卿が他人に対してそんなに乱暴に接したことは今までいちどもない。
「わたしは、カーラに乱暴しようとしたのかと聞いているのだ」
　エイリーク卿はかなり苛立ち、腹を立てていた。
　レイヴがほんとうにカーラに乱暴しようとしたとは、エイリーク卿は思ってはいない。レイヴが何も釈明しようとしないことに、苛立っているのだった。

卿もまた、レイヴと同じように、今のやりとりで、魔族の少女を助けたあとの王の前でのことを思い出していた。ただ、レイヴと違って、卿の脳裏によみがえったのは、レイヴが王の怒りから自分をかばってくれようとしたことだった。
あのときと同じように、レイヴはカーラをかばっている。あのときレイヴが自分をかばってくれたのは、なにも特別なことではなかったのだ。
レイヴとカーラが親しい友人だったのなら、かばおうとするのもわからなくはないが、ふたりはしっくりいっていなかった。それがわからないほど、エイリーク卿は鈍感ではない。
カーラはレイヴに警戒心をもっており、レイヴもそれを察して、彼女を嫌わないまでも、距離をおいて接していた。エイリーク卿にとってはいとしい妻でも、レイヴにとっては、義理で接する相手でしかない。
なのに、そのカーラと自分とは、レイヴにとって、たいして違いのない存在なのだ。
それとも、弁解してもむだだと思っているのかもしれない。レイヴは王をわからずやだと思っているようだったが、自分もわからずやだと思われているのかもしれない。
自分がレイヴを友だちだと思っているようには、彼は友だちだと思ってくれていないのではないかと、ずっと不安を感じていたのだが、まさにそのとおりだったのではないか。
その認識は、エイリーク卿の心を傷つけた。
「どうなのだ？　カーラに乱暴しようとしたのか？」
エイリーク卿の再度の問いに対して、レイヴは再び同じ返事をした。
「奥方に非はない」
「では、おまえに非は？　答えによっては、おまえはわたしの友情を失うことになるぞ」
レイヴはかすかにびくりとしたが、三度目の答えも同じだった。
「奥方に非はない」
「ほかに何か言うことはないのか？」
「ない」
エイリーク卿はレイヴから手を離し、指先を突きつけるようにしてどなった。
「出ていけ！　夜が明けるまで待ってやるから、朝になったら出ていけ！」
「出ていってもいいのか？」
少しとまどいながら、レイヴが訊ねた。
「王さまに咎められないか？」
「気にかけてもいないくせに、心配しているようなふりをするな。とっとと出ていけ！」
言うなり、エイリーク卿は部屋を出ていった。友情を失うと言われても、レイヴが動じなかったことに、卿は傷ついていた。が、かといって、怒りに任せて彼を牢に入れる気にも、まして手討ちにする気にもなれない。
卿が部屋を出ていったあと、忠実な従者たちは、後顧の憂いを断つために、主君の意に背いてもこの男を斬るべきだろうかと、内心迷った。
だが、そのふんぎりがつかずに立ち尽くしているあいだに、レイヴは、朝になるのを待たずに部屋を出て、城から去っていった。

　初雪がちらつくなか、レイヴが、かつてエイリーク卿に過去の話を語った丘の麓まで来たとき、「レイヴ」と呼びかける声が聞こえた。オレインだった。
「まだいたのか。帰れなくなるぞ」
「あなたが心配だったからよ。どうしてほんとうのことを言わなかったのよ？　あんな疑いをかけられたのに？」
「どうしてそれを知っているんだ？」
「あなたのようすを魔法でときどき見ていたの。それに、あなたの身に重大なことが起こったらわかるように、魔法をかけておいたから」
「皆が魔族を恐れる気持ちがわからなくはないな」
　レイヴが眉をひそめた。
「そんな力をもっているなら、恐れるのは当然だ。城のなかにまで忍び込めたしな」
「力を恐れるなんてばかげている。力より、意味もなく力を恐れる心のほうが、よっぽど恐いわよ」
　それはたしかに一面の真実だったので、レイヴは反論しなかった。
「あなたはかなりまずい状況にいるのでしょう？　だったら、わたしといっしょに来てちょうだい。わたしたちは、人間と違って、異種族だからといってやみくもに排斥したりしないから」
「子供の求愛を受けるつもりはないと、何度言ったらわかる」
「求愛のためばかりに言ってるわけじゃないわ。いやなら、そのことは考えなくてもいい。人間の世界で暮らすのが嘘のように、安らかな暮らしができるわ。人間の世界にいたら、あなたは傷つくばかり。いつかあなたは、身勝手な人間のために命を落としてしまう」
「そんなやわじゃない。それに、身勝手な人間とおまえは言うが、少なくともエイリーク卿は最後まで親切だった」
「どうしてそんなことを言えるのよ。あんな女の言うことを真に受けて、もう冬になるってときに、あなたを追い出したのに」
「身分の高い者の不興を買ったり、まして妻にちょっかいをかけたとなれば、よくても牢屋入り。へたをすれば、手討ちになったり、死刑になったりするのがふつうだ。現に、そうやってくたばったやつの話を聞いたことがある。おれがエイリークにあずけられた状況からいっても、牢屋に放りこまれてもおかしくはないんだ。でも、彼は出ていけと言った。結局のところ、逃がしてくれたんだ」
「そういうものなの？」
　オレインは首をかしげた。人間の身分制度のことは、人間社会を初めて見聞きする彼女にはよくわからなかった。
「どうして同胞たちは、そんなところに長く住む気になったり、迫害されるまで人間といっしょに暮らそうなんて考えたのかしら？」
「そう言うところからすると、おまえは魔界からきた魔族なんだな」
　レイヴがそう言ったとき、遠くのほうから馬のひづめの音が聞こえ、オレインは、道のわきの茂みのなかに飛び込んだ。
　やがて、夜明けの薄明りのなかに姿を現わしたのは、エイリーク卿だった。
「忘れ物だ」
　エイリーク卿は、毛皮で裏打ちされた外套と、布の包みを放り投げると、驚いたレイヴが何か言うひまも

なく、来た道をそのまま引き返していった。忘れ物と言われたが、外套も包みも、レイヴのあずかり知らぬものである。
　包みを開けてみると、レイヴが取り上げられたままになっていた剣と、もらいそこねたと思っていた兵士の給料の倍額ほどが入った皮袋と、パンと干し肉と葡萄酒、それに国境を越えるときに必要となる通行手形まで入っていた。
「たしかにいい人みたいね」
　オレインが茂みから顔を出しながら言った。
「夢ではなかったって証拠が残ってしまったな」
　言いながら、レイヴは外套を身にまとった。冷えきっていた体に外套は暖かく、心地よかった。
「夢って？」と、オレインが無邪気に訊ねる。
「夢みたいないい暮らしをしてたってことさ。そういえば、おまえは、魔族のところで暮らすのが、嘘みたいに安らかな暮らしだと言ったな」
「ええ」
「今まで夢を見ていた。だから、夢は当分いい。前みたいな終わらせ方をしないためにも、別の夢の中に入ってしまうわけにはいかない」
「何の話？」
「他人に話すような話じゃない。それよりさっさと帰れ。じきに雪が本格的に降りだすぞ。北のほうなら、もう積もってるんじゃないのか」
「そうかもね」
「おい、帰れるのか？」
「だいじょうぶ。魔法で野生の獣や鳥を呼んで、乗せていってもらうことができるから」
　そう言うと、オレインは今度こそ北に帰っていき、レイヴは、ひとまず国外に出て、どこか大きな町で冬を越すことにした。
　そして、春になると、レイヴは、またホルム王国に戻ってきて、エイリーク卿が罪に問われずにすんだことを確かめると、再び国外に出ていったのだった。
　レイヴがホルム王国に戻ってくるのは、それから四年のちのこと。それはまた別の話である。

赤の領主と黒の兵士

http://p.booklog.jp/book/80294

著者：other-world（立川みどり＠アザー・ワールド）

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/other-world/profile

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/80294

ブクログ本棚へ入れる

http://booklog.jp/item/3/80294

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ